

地域を支える看多機

第2回

一般社団法人ソーシャルデザインリガレッセ
(兵庫県豊岡市)

看護は暮らしのそばに

兵庫県北東部に位置する豊岡市の人口は、約7万8,000人。2020年1月時点の高齢化率は全国平均の27.91%を上回る約33%で、2025年には34.5%になると推計されている。この地で高齢者を含む地域住民の健康と暮らしを支えているのが一般社団法人ソーシャルデザインリガレッセ。訪問看護と看護小規模多機能型居宅介護（看多機）のサービスを提供している。

リガレッセ立ち上げ前は他県の病院で勤務をしていた代表の大槻恭子さん。看護師として働き始めて、ある違和感を覚えた。「看護は暮らしのそばにあるもの」との考えを持って臨んだ看護の現場だったが、病院内で看護師が行う業務が多く、なかなか思うような看護ができなかった。そんな当時の様子を大槻さんは「病」を中心に物事が進んでいき、ベッドの上で命が流れていくようだった」と振り返る。

その後、豊岡市に移住し、看護師が地域で活躍し住民の役に立つにはどうしたらよいか考えていた際に出会ったのが訪問看護だった。訪問看護は在宅療養生活を支えるには不可欠なサービスだ。利用者の生活の場で看護を提供する

醍醐味（だいごみ）を感じた一方で、90歳の利用者が最期の時に救急搬送される事例なども経験し、自宅で最期まで暮らしたいという本人の思いと看取りたいという家族の思いが置き去りにされているのではないかと思うようになった。看取りを支援できるステーションを立ち上げたい、という気持ちが芽生えた。

「もう一つの居場所」を作る

自らの理想を形にすべく起業を決意。2014年に笹川保健財団が募集していた日本財団在宅看護センター起業家育成事業に応募した。研修を終え、2015年に豊岡市日高町で訪問看護サービスの提供を開始した。その後、利用者が「自宅や病院ではないもう一つの居場所」を求めていることが分かった。「利用者とは『ずっと自宅で療養生活は継続できない』『最期は病院に行きたくない』という2つの思いを抱えていて、どうにかその間を取り持つことができるもう一つの居場所ができればと考えました」。そこで2017年に看多機のサービス提供を開始した。

大槻さんが看多機事業所として選んだのは築150年を超える庄屋屋敷だった。温かみがあるかつての庄屋屋敷に入ると利用者も自然と表情が柔らかくなる。また室内の一部をあえてバリアフリーにしていない。「人と人がすれ違う時にぶつかりそうな場所では、お互いが譲り合う。自然とコミュニケーションが生まれます。そういった日常での出来事をそのままにしておきたかったのです」。

看多機はサービスの幅が広いため、時に特徴



築150年の温かみのある開放的な空間

が伝わりづらい面もある。そこで、リガレッセでは看多機のコンセプトを『食べることを再チャレンジする場』とし、さまざまな取り組みを行っている。摂食・嚥下訓練などで実際に経口摂取できるようになった利用者は数多くおり、それにより体力が戻って要介護度が下がるケースもある。

食材にもこだわり、事業所に隣接したスペースに畑を設け、無農薬で野菜を栽培している。野菜は看多機利用者への食事だけでなく、隣接するカフェの料理でも使用している。大槻さんは食の大切さを伝える場としてカフェ「miso（みそ）」を2018年12月にオープン。古民家の趣を生かし、また無農薬野菜をふんだんに使ったメニューは地元でも評判だ。看多機とも隣接しているため、自然と事業所内の様子を見ることができ、「『看多機ってどんな所なんだろう』と思った方も利用いただいていますから、施設見学の役割も兼ねていますね」。看護師として「生活の中にあることで生きている看護」の探求を続ける大槻さん。もう一つの居場所である看多機を中心にその取り組みはさらに広がる。